



## 北九州空港の湿地帯に対する AGE 委員会の取り組み

北九州空港 南側  
湿地帯



日乗連 AGE 委員会は、北九州空港視察を開港前、開港1年後と2回行いました。開港前視察では、空港南側の湿地帯（上図矢印）が、主に次の2点で大きく安全運航を脅かしていると分析しています。また、開港1年後視察時から、現時点でも改善されていません。

- ① 鳥をはじめ、多くの野生動物の住処となり Bird Strike などの危険性が高まる
- ② この湿地帯に航空機が落ちた場合、救難救護活動を極めて困難にする

<参考：この湿地帯は現在、九州地方整備局の管轄>

この様な状況で7月6日に地元放送局から“空港に働く人が、空港周辺で親鳥と逸れてしまったカルガモの赤ちゃんを空港の敷地内で世話をしている。成鳥すれば湿地帯に放し元気に育って欲しい”と言った内容のニュースが放映されました。更に後日、全国版でも放映されました。地元地域の方々にとっては心温まる話題ですが、空港の安全性を考えた場合、動物愛護の側面だけではなく、鳥が航空機の安全運航に及ぼす影響も同時に発信されるべきだと AGE 委員会は考え以下の対応を行いました。

- ① 空港所長および鳥害対策責任者と面談し、湿地帯に関する取り組みについて議論した
- ② 湿地帯を管轄する九州地方整備局の担当者と連絡を取り、今後の土地改良工事の予定を確認した。

<土地改良工事：深夜帯の約4時間を使い、平成22年4月頃から約1年間の予定>

- ③ 地元放送局へは鳥害の危険性を再度伝え、同時に鳥害対策についての発信を要請した

北九州空港ではスターフライヤー乗員組合も加わり定期的に鳥害対策委員会を行っており、献身的な取り組みが行われています。また、安全な飛行場環境には空港関係者だけでなく、地域住民を含めた地域社会全体の取り組みが不可欠です。今後も AGE 委員会は、安全な飛行場環境作りに活発に取り組んでいきます！

以上